

マーガレットさんのお話

私の名前は、マーガレット・アレク・オレクです。ウガンダ人で5人の子どものシングルマザーで、3人の孫がいます。孫のうち二人はつい最近生まれた双子です。

9年前の1998年12月22日、ちょうど私の42歳の誕生日を祝ったときに、私は地雷の事故にあいました。それは、私が家族とクリスマスを祝うために、ウガンダ北部のキツダムからグルーを通過して首都カンパラに向かっているときのことです。キツダムにはたった2ヵ月半住んでいただけでした。そこで、少年兵として拉致されたことのある子どもたちの心理社会的な支援をする新しい仕事を始めたからです。クリスマスが近づくと治安が悪化してきたので、私はより悪くなる前にカンパラに戻ることを決め、1週間の休みをとっていました。

運命の日の朝、私はミニバスに乗りました。その14人定員のバスには23人の乗客が乗っていました。安全上の理由で、街を離れるすべての乗り物は、軍隊の証明書をとらなければなりません。しかし、私が乗ったバスの運転手は、許可を得るための時間を無駄だと考えて、許可なしで出発してしまい、出発してから20分やそこらの時間で反乱軍の待ち伏せにあってしまったのです。

鋭いカーブのところで、私の乗ったバスの下で地雷が爆発しました。最初、私はタイヤがパンクしたのかと思いましたが、その後、銃声が聞こえたので、反乱軍の待ち伏せにぶつかったのだと悟りました。運転手は何とか反乱軍から離れたところにバスを運びました。ほとんどの乗客は藪のなかに逃げ出しました。しかし、私は走れなかった。その爆発で、私の右足はやられたのです。しかし、私は走り出そうとするまでそれに気づきませんでした。ただ、私の足があったところに肉のかげらが飛び散っているのに気づいただけでした。

銃声が鳴り響き、私はバスの倒壊したバスから離れ、道端の背の高い草のかげにいきました。反乱軍の1人がやってきて、腕時計を奪っていきました。二人目が来ましたが、私は他に価値のあるものがないと思っていました。彼が私の服を脱がし始めるまで。しかし、彼は私の血のついたジーンズをほしがっていたのです。私の心の中で声がしました。「目を開けちゃダメ」。私は死んだ振りをしていましたが、その男は私の体を4度ゆすっていきました。私が動かないと、その男は銃の端で足の傷口をつつき、そして私が死んだことを確認すると去っていきました。

そのすぐ後で、別の爆発がありました。そして火が私のすぐ近くまで迫ってきたのです。ほとんど火傷しそうなところまでやってきました。本当に厳しい状況でしたが、私は祈り、私はなんとかガソリンタンクが爆発する前に這ってそこから逃れる力を振り絞りました。静かなる声に従って、反乱軍のいる間、私は決して目を開けませんでした。今日、私は彼らがどんなだったか知らないのです。ですから、彼らを見るという悪夢から逃れることができます。私はかろうじて反乱軍の手による死と虐待から逃れました。

だいたい1時間くらいたって、爆発のなかを政府軍がやってきました。反乱軍は逃走しました。兵士はけが人たちを近くの診療所に連れて行きました。この診療所は、非常に装備の

乏しいところでした。トラウマを残すほどの傷害に対する応急処置に必要なものも不足していました。スタッフたちの会話が聞こえてきて、私は彼らが応急処置に必要なものがそろっていないと、あるものだけで何とかしないといけないことがわかりました。救急車もありません。私たちは幸運なことに、80キロくらい離れているクリスチャン病院のセントマリー病院に、家畜用のトラックで運ばれました。私は死にたくなかった。子どもたちのことを考えていました。私は困難な中でずっと祈っていました。神様によって、私は気を失ったり意識をなくすようなことになりませんでした。私は痛みがひどくなると大声で祈り続けました。病院には夜の7時に着きました。事故が起こってから約9時間が経過していたのです。そして、麻酔が私を眠らせました。

手術の後、私は退院まで2ヵ月を病院で過ごしました。それから、私の障害をもつ人生が始まったのです。杖をついて動き、私は家族と世界に帰りました。私はもう将来の見通しに可能性を想像することもできませんでした。病院を出て、私は自分自身では何もできることがなく、人に頼った生活をしなければならなくなったという現実と直面しました。私は「家庭」に戻って、子どもたちが3ヵ所にばらばらにされて生活していることを知りました。私はリハビリの間、妹夫婦の家に9ヵ月暮らしました。私はまた、シングルマザーとして私の子どもたちを物質的にも経済的にも支えていかねばならない、という大きな責任と直面しました。

すべてが厳しかった。私は自分の家もなく、仕事もなく、お金もなく、そしてほとんどの友達もなくしました。私の家族は厳しい現実の中で強い結束を示して支えてくれました。後に気づいたのですが、友達は誰も私を訪ねようとしませんでした。その苦痛は私を癒しから遠ざけました。私は怒りでいっぱいでした。本当に必要としているときに私を見捨てた友達たち、地雷を埋めた反乱軍、それをとめることの出来ない政府、子どもたちを家から追い出した家主、などなどあげたらきりがないうほどでした。私は人々への信頼をなくし、打ち解けなくなっていました。しかし、これら人生の厳しい現実が私を強めて、私を回復させました。こういったことが、私に悪いことではなく、よいこと、可能性を見るように教えてくれたのです。私は入院中に会った他の犠牲者たちにピアサポート（同じ経験を下仲間同士の支え合い）を提供するために、病院を訪ねることに時間を使うようになりました。それは、緊急に必要なことはピアサポートだと気づいたからです。

完全に回復して社会復帰をした2000年の9月、ジュネーブで開かれていたオタワ条約の第2回締約国会議において、私は初めて地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）に関わりました。サバイバー（生存者）として、私は何千ものサバイバーたちを代表して啓発活動することを決め、行動していくことが挑戦であり、それがコミュニティに私が返すことの出来る最善の方法だと感じました。それから、私は絶え間なく対人地雷禁止のロビー活動などキャンペーンを行い、地雷の被害者や障害をもつ人たちの支援を、国際的にも、地域でも、そして国レベルでも行っています。

これら活動によって、ICBLは昨年5月に私を大使に任命しました。私は今でも、国際社会

において地雷のサバイバーの立場と彼らの必要に焦点を当て、ICBLの地雷のない世界へ向けた活動を行っています。ウガンダに戻れば、私は、近年カンパラに立ち上げたサバイバーの団体であるウガンダ・ランドマイン・サバイバー協会の代表です。そして、またウガンダ障害者協議会の理事でもあります。信仰に基づく平和探求であり、アフリカ全土における宗教団体の連合で、共に平和構築のために活動するインターフェイス・アクション・フォーピース・イン・アフリカ（アフリカの異教徒間の平和行動）の委員も務めています。

障害をもって生きることは私に多くを教えてくれました。思いやり、忍耐、許し、そしてすべては自立した生活のうえに成り立つということです。そしてまた、何も当然のことと思わないようになりました。それから私は人生には悪いことよりももっとずっといいことがあるということも学びました。これは物質的なものよりもずっと重要なことです。人生のある限り希望はあるのです。